





今金華山
千歳田三三
山ノ形ニ
金華山ノ
同母アリ

夢遊金華山乃記上巻



大槻文庫

抑金華山の事由をたつぬるは聖武天皇の昔
の國始て其をを言へは我みちのく山田の歌
みして大伴の宿禰多持これを言へし
詠すの代代さるゝんともあつまふみちのく山
うこの山花さくときさえしは山を金華山
と名けしは島の略記成るふ山の言ふ
八千餘文讀むと千ハケ廻る千六里ハ
八の谷之ふ千ハの洞を山の前を
の海をいふやるのれをよむるれか

大見大蔵反

る身なれを一たひ訪くそ奇勝を探らハヤ
 と驚ハ一旦夕さく夢寐をいさるがことき
 る年久しうりれと^{ふか}冠せしけう物まひの
 ためも玉をまゆは^いはは産の府より是を
 とめぬればそ急果す處もあつて
 るぬ志のまふその申の秋袿天の新玉園は入
 らせ^い後子^い所^い此^いほ^いは^いほ^いま^いま^いら^いせ^いく^いま^いら^いの^いく
 しま^いと^い十^いと^いせ^いと^い後^いと^い父母の^いあ^いま^いの^いあ^いら^いそ
 め^いれ^いく^いれ^いる^いそ^いは^い新^いま^いか^いま^いく^いた^いつ^い
 産^いん^いは^いさ^いさ^いり^い又^い名^い所^いせ^いり^い所^いの^い巻^い區^いを^いも

文化九年重

さくさく^いる^いく^いお^いぶ^いく^いハ^い奄^いち^いヨ^い暇^いを^い彼^い今^い真^い法^いを
 もせ^いら^いや^いと^い楽^いし^いく^いハ^い仙^い臺^いの^い府^い下^いヨ^いあ^いつ^いて^い後
 とや九月の^いお^いよ^いも^いな^いり^いぬ^い赤^いり^いの^いいと^いま^いら^いひ^い
 七岩井の^い舊^い里^いヨ^いお^いり^い清^いる^いの^いる^いん^いヨ^い七^いひ^いく^いこと
 又^い上^い福^いの^いひ^いく^いこと^い新^い愁^いい^いを^いり^い胸^いを^いさ^いハ^い東^いの
 濱^いを^いヨ^いか^いり^いわ^いく^いく^いな^いり^い時^い一^い足^いく^いり^い
 夢^いし^い白^いく^いま^いか^いの^い懐^い童^いの^いく^いく^いも^い再^いひ^い訪^いめ
 や^いら^いお^いく^いは^い令^い花^いま^いく^いも^いと^いく^い海^いさ^いせ^いと^い暇^いの
 日^いか^いき^いり^いあ^いれ^いて^いい^いう^いそ^いや^いと^いあ^いひ^いく^いく^いつ^い
 そ^い月^いの^い末^いつ^いく^い舊^い里^いを^いま^いち^いく^いく^いま^いつ^いる^いみ^い廿^い一

日としりく日宿うよ志うる
 杉舟より大島海か三
 日まで始うけうきぬれは
 何るもあう海の外な
 りと口惜しく一そちの海
 乃志海塔電の行ふと
 りを詠めをり一のうまで
 再び序ちよしう志
 ぬたう志の果さうり一
 ことのんよか、りそ
 初冬の末江戸の舎は海う
 一及も志村弘強の主訪来
 うて一ツのめつら
 うるう吃あう一多杜麻の
 歌遠島の内なるたま
 一演としりく所よ天^も平の
 昔国日王毅福々すまゐ

一と云古歌ありと云俗の
 いひはう一うるも
 六ハうきまてしうしう
 ずも及ぬるもそはは
 可うして舎花うりその
 塔公せ一も信一西
 花のう一和よやあうん
 ちどお経うぬこれ一
 路
 うさうううして序も志
 考ぬたるもあうはれハ
 そのせうるまを古うめ
 るんとねもふよつ
 けてもあそ井社舎花語を
 志せ一ことなをせひ
 おしつ、いぬるしもた
 なたに廿五日のねま
 げく
 一う夢る一やうハさう
 の海成海うそ徳島
 一ううのうたぬなう一
 ううそ志の海うりはれハ

山谷の京橋海邊の若やうらなを久しくきく
 けりしあまのあまやうらなを久しくきく
 たいつゝものこねもる。あつたあれと多あは
 乃根な〜とさるも嗚呼すると思
 とさるもあつたあれと多あは
 ら樂〜もあつたあれと多あは
 をみるんもあつたあれと多あは
 のあつたあれと多あは
 志と懐ひて思ふ〜樂む〜とさるもあつたあれと多あは
 癸酉九月廿五日の松平君にあつたあれと多あは

申の九月廿日あまのあまやうらなを久しくきく
 下一の物海邊の若やうらなを久しくきく
 したるやうらなを久しくきく
 云人の許に宿り〜と思ふ〜とさるもあつたあれと多あは
 且知〜あつたあれと多あは
 すもるもあつたあれと多あは
 るる故や〜とさるもあつたあれと多あは
 は宿の〜とさるもあつたあれと多あは
 あり〜とさるもあつたあれと多あは
 おし道あり〜とさるもあつたあれと多あは

しや上川を打漁り糶谷とつづき 磔ふおりに
往先の小川く 水増しそ人のゆきし ともやまぬ
とらばさきききし しみなきき跡き立水と
き石ふんその川き ながらつ、みせりしは
の程なきあしつ みる人き思とつ三は
老とものかなきむき なるくさし なるさくも又
いとねし ころききうし といひし 小村の邊よ
りりきうり 雪後きたるうく 戌刻きく 探せ
津しつあふきき 着しと見えうり 夜も又ちあ
空をけううく ころききうし といひし 小村の邊よ

思ひこみ 浦りつしまし 時おひし けきき
事をも自らあきしめて ねあはれは
あらしきうし なるかき なるいふく
をきかたれを なるぬと なるよきなる
もあしぬを又し なるぬきなる なる
はらうし ぬれと ぬれなる のおきききなる
らぬれは ああきなる なるし なる
なるふ町田は なるなるの なる平つらぬなる
綿きき なるなる なるなる なるなる
くあしきなるなる なるなる なるなる

八山つゞきの谷間たつこはるきときこもくしあよ
 リる水をけしきけしきさるうらう流のこし
 きまふもあまこの流は取のたゆをみさくゆく
 ま流ひりしきこまきまひきしとこれハ智
 の内はありきたるまやく流るまゆへことと忠
 ふのみなうまれう志げくゆはまううゆ
 やをちみこふま一あう人まあふま休ひ
 しハまがもうりとまをたうしとたもまゆをま
 らしくと日の光みんまハ晴あま流をゆ流おま
 月のあけをえま地なうりうまきりいあく

天をれそ銀聖川といし一源は志若股の流しあふ
 所といきく川をひたをゆく移俄に風烈しく
 吹せせうまもろく源場まゆれはこまをく水
 うま流うまもしこまゆひるま流うこまかろ
 んまもまこゆれいしきまお流うまやうそ麻股
 源まゆりまゆれいと志うとめ石巻とまき
 こまし津一いそらんとんまきまま味うしゆま
 こ我又二とまを生しこくまもま流うまゆハ七
 しハあ流のまをぼるままやあまんまゆれゆか
 こまをまきまをたふ流河係まゆの根なまゆま

花をふくむ^花のこころ梅のなんあまのやうに
たふあふいで^花のうらとしくちをさするを
りとけい^花のうらとしくちをさするを
し^花のうらとしくちをさするを
ぬあ^花のうらとしくちをさするを
の^花のうらとしくちをさするを
山^花のうらとしくちをさするを
ふ^花のうらとしくちをさするを
山^花のうらとしくちをさするを
と^花のうらとしくちをさするを

くは^花のうらとしくちをさするを
つ^花のうらとしくちをさするを
な^花のうらとしくちをさするを
そ^花のうらとしくちをさするを
う^花のうらとしくちをさするを
名^花のうらとしくちをさするを
其^花のうらとしくちをさするを
口^花のうらとしくちをさするを
我^花のうらとしくちをさするを
け^花のうらとしくちをさするを

因縁ありてやを毎の外に加護ありて能くは
此處を昔の事なりとてこのとふも後にも又か
しかりりり能くはくさくへの心はつひとや
この本村をいつうも宿を言免あるに能くは
ふ所まで往來の形をも罷りしとてやその人
今も厚く君を誦し列位を告ぐ能くは
とたりは夜ハあふも宿を言免あるに能くは
り能くは新工波穏なりとて言ふも後にも
後孫のよきひとの心なりとて言ふも
今も是れは能くは能くは能くは能くは能くは

のよきは能くは能くは能くは能くは能くは

きくうふふみと新工波穏なりとて言ふも
をいも井邊を言免あるに能くは
のか、能くは能くは能くは能くは能くは
さして能くは能くは能くは能くは能くは
いふも能くは能くは能くは能くは能くは
是れも能くは能くは能くは能くは能くは
ふは小島くも能くは能くは能くは能くは
能くは能くは能くは能くは能くは能くは

のをとよみえ海より小竹原をなが溪打のそま
於溪柳の浦月の浦侍原萩の原小竹を溪打の溪
まつぬ原麻屋を浦小細念大原給分小澤十八
成るんとし船人のそししをとよめたり溪
原のこのすくうあこころの漕河よむわしそれ
うかよも蛇を釣るる人多うきみきりま向ふ
海牛よるちうくそまう田代原網地長濱のそ
あれあまう大まらぬの島く浦くをそぐく牡麻の
そをわ呼は午ハケ取あうとししお能川まの
あつそをそんとおまよほそ山のうひようをそ

の鯉のあまこれゆし路りのふて福をくか
こよそをゆきまるとねまうかひし嬉しくも
楽しくしそまうやしく漕河の従ひふまとの
山よかくれそそ船をそまをゆくのまよ大津の
向ひて橋あまうハ馬橋ちうとなんそれうは
ううあまうまううの山あうこまけ漁家の見
ゆまハりの能川まうとそ船を漕まううまうま
て丸里の海程まうとゆま日もそやまうま
そまうそ船まうあううてとあまうまうま
休ひまの海よりいそまんとおまうてま

八十八丁をうりて約々家とりて
 亦るる山と数ルハ山多^山なりて一川の宿室
 の詩樓をそりての島に渡らんといふものハ先
 此詩を擧げしを彼もも同じく詩堂ありてこそ
 といふや 船をゆくを船のつらさうをさうや
 つらさう ぬほあはく船のつらさうハ 津堂を
 合せし志の船をさしハ こそめをゆき再び船川に之
 ろりて滞りて其時のむさを待たし海と根
 るる口もても 互に津をつき合せしをさうりて
 の船もさうをまはし山多ふりてさうとみよの

うりてをさしとみよの山にさるるは新
 しき^新鞋を踏みしをさしハ 山はむる時にかふ
 うりてをさしとみよの船のつらさうハ 彼
 山の津沙石もさるるも他よりつらさうといま
 しめ惜之給ふを思ふとみよの船のつらさうハ
 変ふ新しき鞋もさるるも他よりつらさうといま
 前とゆきと坂ばかり船の頂よりつらさうハ 大
 なる多ふありてさうの睡屋いとさるけし合
 算ハさう目の前も実然とありつらさうのさ
 びさうありてさうもあれハさうもさる津をさ

しのききあつてあま鞋としくぬき捨て、忍の
 うしがあつてうぶ波をかめり、くま船ハ人紙糸
 ちりちりちやぐ漕ちを誠ハ同ハ髪と入れさふ
 急卒のさひひまてあうきつて、は流りのちつ
 うきと、しふ、くくふあまさきまう、あまさき怒
 派のをけ、きあやうとせ、大石あは僅ハ少於五
 丁一いん碁いんとてあま、ととやれとあやうきこと
 初のこと、海中流ハ忍ハ波平うらとてたの
 うふ江島あまのいせれつ、しんと代流さる、
 高うととりふき向あよああ、あ、あ、あ、三稜

しのききあつてあま鞋としくぬき捨て、忍の
 うしがあつてうぶ波をかめり、くま船ハ人紙糸
 ちりちりちやぐ漕ちを誠ハ同ハ髪と入れさふ
 急卒のさひひまてあうきつて、は流りのちつ
 うきと、しふ、くくふあまさきまう、あまさき怒
 派のをけ、きあやうとせ、大石あは僅ハ少於五
 丁一いん碁いんとてあま、ととやれとあやうきこと
 初のこと、海中流ハ忍ハ波平うらとてたの
 うふ江島あまのいせれつ、しんと代流さる、
 高うととりふき向あよああ、あ、あ、あ、三稜

巴かこちふより種々の名を帯けりつ定あるは
拾きしてその谷水と溢るる種名をさめり石
と研かすもさうさう石傷をさめり石動とい
ふもほろはれぬけ石鳥帽子石中より水をもせ
る大石を弘法堂程石とす溜るる水を弘法水
孔雀池具石名を石と名けしも石をそり
ほり水あり石を年種り木石にそり多核ハ
れも採石をはりしもたやもさうさう波つ定
はちやかく花つけさう由緒のこころはくさう
二とすもさうさう石の上よりはくさう

ハ杉のまゝつる後ろつるは垂りて駭れおひ
つる人の来るを待りありて流をとりあれた
れもさうかゝるさう由緒もたあまらるる
らるの石を水の海とすさう江島とあり
るはあゝ鑑頂なる龍藏拾取りしは禁り
つるもさうのさうは拾ハ下とつては流記より
ハ天竺を熱池の善女龍王十一西観音の垂跡と
あるは地方ハ丸間さうりほりたひりり
て流記さう杉穀株をさうりて山頂のま
と稜をさうりしことありと知れり祠の傍に

寶道塔 たをこ はをこ ろを す新 をう 四面 の眺 を唯
大洋 を を み 炎 を た て を く 天 と 合 を 宮 を 是 天
 下 東 の 極 を も り て く ま を 北 を あ く の 位
 島 を あ ら ふ 出 渡 を く の ミ を 下 を 下 を 打 ち く
 き 芝 と ぬ せ く る 一 と 記 を 体 切 と 稱 を 網 地 也
 深 目 下 見 也 た む む も あ く 又 下 り 等 也
 け さ ま い ま ほ の 言 ま く 低 く も 手 成 り 連
 費 く く 下 れ ハ 黄 を 石 を 之 を 刀 石 あり 以 石 機 枝
 教 支 強 よ 大 を 刀 も す 形 切 く る 形 を 為 を も か
 の ふ を 刀 よ 少 あり て これ を 推 す も の あ る ハ 奇

と や り ん 怪 や い ん 秘 名 は 所 也 水 晶
 石 い く る 本 名 を 機 鋒 石 と 稱 を 黄 を 山 神 社 の
 も あ く 一 と り ハ な も あ る 一 の 一 各 これ を
 仰 き ま す 唯 機 を 清 く る 形 ハ 六 機 を
 か て て さ 十 を 得 也 も 十 を む ら と 云 昔 ハ 機
 言 う り ハ 就 機 を も あ れ て ま ま と 推 り と
 い ハ 怪 む 一 一 試 を す と て あ ま を つ を 記
 て 是 を と ら 一 一 多 ふ 十 一 機 往 あり 海 世 界 の 内
 か る も 大 の 水 晶 ある 層 も 覚 を ん あ ら つ ら
 あ け 初 め 一 と た 一 歳 を 美 を 経 る も の あ ら

ふいの門をくぐりていづれも来りたれハとて
 も東ふ向ふ海を大逆小を奇業をもあふい
 てるせぬんうし清く寺をわしめしを限と約
 せしめたりそれと頼りきかからされを必
 りせりたりといふむたさくひるるともいひ
 ハきの用なきもあれハはるるま^強い^いこの
 影叶くれよといふよこれ師の坊の命をまわき
 あり^強い^いふふれ登をうらふくし^強い^いせり
 一とてききうん^強い^いく^強い^いの坊く^強い^いハ^強い^い
 よきよ^強い^いハ^強い^い又きよ^強い^いハ^強い^い寸志をもあふし^強い^い

しをといふくよきよのこ^強い^いたるよ^強い^い
 てもかくんせきうあり^強い^いハ^強い^いせん^強い^いあり^強い^い
 せ^強い^いせ^強い^いハ^強い^いは^強い^いの生れを
 るが今ハ^強い^いの^強い^い永に^強い^いを^強い^い
 の^強い^いあ^強い^いて^強い^い本^強い^いの^強い^い日^強い^いは^強い^いか
 ち^強い^いあ^強い^いて^強い^いは^強い^い山^強い^いの^強い^いつ^強い^いを^強い^い
 巡^強い^いせん^強い^いの^強い^い志^強い^い我^強い^いも^強い^いや^強い^いを^強い^い
 再^強い^いい^強い^いよ^強い^いあ^強い^いの^強い^い時^強い^いあ^強い^いし^強い^い
 は^強い^いあり^強い^いあ^強い^いの^強い^い後^強い^い世^強い^い功^強い^い徳^強い^いも^強い^い
 併^強い^いあり^強い^いれ^強い^いう^強い^いし^強い^いも^強い^いく^強い^い

のつ嶋ハニころもあつてもまことりしころころ
 あつふ海よりあつふ海にまことりしころころ
 海を新大激浪は来の勢いとめさまし一程なく海
 なるいふるなるいふるなる名もこれなるまことり
 名つくと後新千丈一石も実より置も二子置
 もまことりしころころ大洋よりあつふおあつるまことり
 ころころ雨の降るころころ又も傍よりころころ向
 ひりしころころ大機と通るこれと新大の石と石と線ま
 とわりきるなるこれと大あぐみとつりしころころま
 とまことりしころころのあつふまことりしころころ
 ころころ

ころころのあつてハ又もつりしころころ
 も又物もころころまことりしころころ
 ハ丁粒もまことりしころころ
 つりしころころのこみ入るころころ
 ぶん一名をふ人海より昔は山も麻布ありし
 時疎罰あり一時いふはつけてふ人の負ぶこ
 とくころころみ流めころころ
 ころころ天狗海より船は独銘水けさ魚松木のこ
 とふ小海も又海なる物ハ大平と名もまことり
 ころころのころころつりしころころのまことりしころころ倍せ

奇絶たゞ 目を驚くをさうりたり 他を亦か
 如ふ大石ありそのみや家たるをまも及か
 る不るうとも亦白浪の折あくるさゆをれを
 ごとくせらるる後よりむらひ少く絶れをあら
 くとて重割界胎藏界を各つくるをまま
 名よ阿又大お道たよいなる先うらなる石巖せきがん
 沿ひ其罅隙をほくくしてこれを重むる石壁三
 面を圍み度さ十数丈をまるとと敷十おん俣道のく
 つれさるるあまくうして一面ハ海は向くをその
 道よおいらる流るのこを砕けをせんと流るの

ひこれより風成加少れハ怒海まじくをけくは
 しくしくさるるをまかせまけくさるるのふ
 新造を争つて電をほるものに大風雷を起れり
 あやましく流るる確はるるさつとも奇観なりとい
 一ともさるるあましく心こころ魂たましい消るるろさむれを
 うらおあゆ又たのこころをさるるに名は流るるさ
 海の中よりさるる大石をたみあけくうら高
 橋のこころを頂上方面なる一大巨石を載せ今
 よこましくお落んとさるるさるせ一城橋石を呼そ
 奇絶他よたさるる面をまのさるる大のさるる東岸よい

たりてハ石いふ巨大をなせり 小こ道みちハこれいふ
や、隔へりりぬときく時ときをよ貞たけな氏うぢ乃のちひひを宗
もこの大道みちは此こゝれはちち方かたりてたゞ石いしを曳
むのときときり門かど空あきくくてななを日氣き力りきは
えんえんなる思おもたれれここの先まくくの筋すぢを探らん
ととああははいいつつここままももああなないいせんせんといいひひれ
ともともれれををよよ興きよう一いつ世せの宿しゆく敷しきももぬぬそそここ成
好こうせせハハ語ごををよよののななれれととももくくる
くくくくハハ無むととああかかるる奇き絶ぜつ妙めう宗そうをを果くわ
させさせひひぬぬるるハハ生せい涯えいののここののここをを思おも忘れわすれれここ

ししららハハ日ひををややききかかりり寺てらままのの帰かへ路ぢもも往わう
ききりりれれををここれれららくくくくららももゆゆええくくとと
皆みなくくつつををよよ向むかひひららのの旁わきをを厚あつくく語ごくくハハ丘かみをを
わわりりぬぬええハハ山さん道みちをを也やれれハハさいさいのの河か原げんああまま板いた
山さんのの外そと河か原げん院いん聖せいををいいふふ石いしをを強かぢ少せうをを思おもりりくく寺てら
ももゆゆるるハハああららちちううとと終しゆうをを道みちをを往わう名なここのの寺てら
ハハああままややみみととああんん海かい大だい道みちよよハハ山さん中ちゆうのの捷せつ徑けい
ををととりりててままぐぐハハ寺てらももゆゆるるありありとといいつつりりととや
りりももままををぬぬれれハハととももくくくくももままををせせ門かど空あきりり志し
ままくくハハ海かいををたたどどりりハハ麻あままつつええハハ

よりすきとも小あしをせよ谷水と掬くて
咽を浮く息もつきあぬありさ由堂は落と
し枝を板とハうる思あや者し志りしハ
つ定うるもりのくよちうひこうの通けも
ハ必寺より通ひの人来るくハハハハハハ
ゆのくもくもやをいひてうをうハハハハ
くとはされとるはうのくハハハハハハハ
らんもろの動は動さうつる者もハハハハ
の人たうもハハハハハハハハハハハハハハ
聲のかきりよひありハハハハハハハハハハ

の子き人とハハハハハハハハハハハハハハ
たのひよあつくのぬほまほくはふこと
く後よりハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
我のいのちる災難ハハハハハハハハハハハ
せハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
たれと一人ハハハハハハハハハハハハハハハ
あをきことなるゆんといぬうりハハハハ
ハ男といさくをいハハハハハハハハハハハ
ハあのかのこき人ハハハハハハハハハハハ

ききくをうきよこころ大にわよきまの、志
ろろち我くはきうをちきやうろくちと吹て志
ち休らひ居るうよそたのこきと思ひ出
またちのあふん念をもとめあふんよよ一なる
らんこころををう振うる飯少くお乗
れうを振うしういひの、しきしきまをまざれ
てまことお忘れたりとを振うらけし。洞裏よ
りはつ五つしうおしてこれを六人をうう乃人
くまうちあふん三ふりを記あはて、しうしぬる
よ飯つるれしうおるハハかふる一潭の念も改修

當時の念よをこころみおほえらる門をハそ
のせしよはきく飯をまうるれしきまもあ
さすひらひてくしし、ハ粒も皆辛苦しりの
ひらひしをををうとみりんとおきふもあ
しその時の嬉しうきこころのちよこころ
あふもゆりてほの思ひ出をうらうはたまき
よくくを力をえそ又のあうらうしうくをい
まきよを福まき寺をゆりまぬ成の別世もこ
しきまこころしうの思ひしう一念の勇氣ふ
うふ深山幽谷のけしき園杖険隘の徑ま

ることとわづらふれば此の山に詣んことを
を志しつらき。さきよ向渡までゆく。うた
のさうらの風海をくられ能川の漁家よんふ
らぬもこのまうてはあまの海り山中巡覧ハ
したれも海く渡りし日ハ寺よ一宿一山めぐ
りて海り一タも海渡りせむけられ又こ
よこまう二扱とあつせう又たらハきのふは
島よ渡りその中よ山めぐりし海りてけさ
このころあつこし海り海くく日暮れあやみ
あつるまうこし海り海く寺宿せり

ついでに山を言わぬ海りこころハ古き
きも及さる。あつこし海り海くく海り海く
ハ言ひ知らる。在木をあらく。おそくまうそ
おしつよあつこし海り海くく海り海く
らんハぬきをて、花のうたりハ人頗る程の心
あり船の中よこし海り海くく海り海く
回船と約ハ新知程海り海くく海り海く
を

重花山海り海くく海り海くく海り海く
そめたるを海り海くく海り海くく海り海く

Blank page with vertical lines for text.

頃聞某君東遊航金華抵則日莫使其左右燃
一大炬火以探其勝蹟云以余徵諸古人秉燭
於花燃犀於水猶且乏厥人也而况於燃炬探
勝耶可謂奇也世有何元朗續之世說之尾予
壯其遊賦半律以贈

聞君尋勝海東隅航抵金華叱石徒燃炬名山窺玉
室驪龍窟底似探珠

源五城

壬申季秋陪 磐水先生游金華山

勢若大軍来自東 砮崖高浪争雌雄
天光晴泛扶桑外 風色秋深孤島中
龍女樓臺臨碧海 羽人宮觀逼蒼空
山邊都有黄金氣 樹杪兼看落照紅

宿渡波

江村秋月掛風霜 時有歸鴻翔天際
翔馬得卷新数行 字無端游子渡沾衣

登魔鬼山

牧山一望隔蒼烟 帆影遥連萬斛舩
西岸人家雲外湿 漁歌縹渺夕陽天

影田隆徳

少知花咲とやえしハいそく人のあがま
そとて多く世ま高き山の名のこすきり侍り
しよあといひあはぬしのゆえよはつ何いおとろ
まあといひめて平所やきたらん心地のせよといはぬ
の情あきあきあきあき
みちのくまほやくら社のまきみり何らくみ
ゆるくくたのゆ

文化九年

此書ハ祖考磐水存君ガ金華山ニ
梓ビタニヒシ時ノ紀行ナリ公許ヲ得ズ
レテ行カレタレバ文ヲ夢遊ニ托シテ名ヲ
署セズ今其筆ノ後ニ減センコトヲ恐
レテ卷末ニ一言スルコト以ノ如シ

明治十年丁丑八月盡

不肖孫大槻文彦記

大槻文彦藏

